第４学年　社会科授業実践

1.　単元名　　わたしたちの県のまちづくり～小田原漆器が語りかけるもの～

2.　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
・小田原では、人々が協力し、特色あるまちづくりや、観光などの産業の発展に努めていることを理解している。 ・地図帳や各種資料を活用し、小田原漆器について調べることができる。	・小田原漆器という伝統工芸の歴史的背景や、人々の協力関係に着目して、地域の様子を捉え、それらの特色を考えて、表現することができる。 ・小田原漆器という伝統工芸を保護していくために、自分たちにできることは何か、各種資料を基に考え、表現することができる。	・小田原漆器の学習をしていく中で、学習問題に対して事実を基に考えたり、自分の考えを見直したりしながら、主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。 ・小田原漆器を保護していく問題を自分事として捉え、当事者意識をもって問題解決に向かって考えようとしている。

3.　教材のとらえ

本単元で中心として取り扱う「小田原漆器」については、小田原は約 400 年間続く伝統的な漆器産地となっている。起こりは、室町時代で、箱根山系の豊富な木材を生かし、漆を塗ったことが始まりで、戦国時代に小田原城主の北条氏が漆器職人を呼び、発展していく。江戸時代になると、庶民も使える漆器づくりが奨励され、城下に限らず地の利を生かして江戸にも多く流通し、漆器産地として確立した。

小田原漆器は、木地師→塗師→蒔絵師の工程で生産されていき、一般的に漆器づくりでは、最後の工程を担う蒔絵師が全体の指揮を執る。しかし、小田原漆器はその反対で、最初の工程を担う木地師が全体の指揮を執っている。これは小田原漆器が「木を主役としたモノづくり」の象徴となっているためである。

今回取材に協力してくださったＯ木工所の３代目であるＯさん（６７歳）は、小田原漆器の木地師部門唯一の伝統工芸士の資格をもっているが、「もう木地師が全然いない。今４件残っているけど若くても４０代で、３０代以下はいない。小田原漆器は、伝統工芸だけど１度なくなったら、もう終わり。復活はできないね。」と、近年の木地師の後継者不足を問題視している。現に、最盛期は３００人以上もいた木地師は、箱根物産連合会によると、現在はたったの８名にまで減少している。神奈川で鎌倉彫と並んで二つしかない伝統工芸品を保護し、残していくことが、本単元の、「**伝統的な技術を生かした地場産業が盛んな地域**」である小田原市の価値を残していくことに繋がると考える。しかし、本単元で重要視したいことは「伝統工芸を継ぐ」ことではなく、小田原漆器という、私たちの暮らす地域に古くから根差した伝統工芸を通して、小田原市のまちづくりとしての良さを感じ、「小田原漆器」の問題について当事者性をもって考え、どうしたら小田原市の価値のバトンを繋いでいけるのかということである。

このことについて、Ｏ木工所に来店されていたＳさんという方が、「小田原漆器は、和の要素が強い。洋風化している現代にあったデザインにしていくことが大切だと思う。」とおっしゃっていた。この着眼点を参考にしていくと、「小田原漆器をどうしたら、多くの人に知ってもらい関心をもってもらえるか」という、自分事に置き換えて考えることができる。

また、本学級の児童は、総合的な学習の中で、「うみかま探検隊～小田原のうみとかまぼこ両方守りきれ！～」というテーマのもと、小田原の価値を残すために、「小田原の板付き蒲鉾」を周知する方法を考えて、映像制作を行っているため、小田原漆器を多くの人に知ってもらうためにどうしたらよいかという視点で、教科横断的に教材をデザインしていく。

4. 本時の目標　「小田原漆器とプラスチック製の容器を対比しながら、自分なりの考えを表出したり、話合いや、資料をもとに考えを見直したりして、自分の考えを深めることができる。」

5. 本時案（６／１１時）

学　習　活　動	教　師　の　支　援
○学習問題を確認する。 Ｈ君「小田原漆器が使われなくなるのは仕方ないのかな？」	
○エレベータートークで自分の考えを伝える。 ○立場ごとに、自分の考えを表出する。 【仕方なくない】 ・小田原漆器は、長い歴史がある伝統工芸品だから、もったいない。 ・使い続けないと、小田原漆器がなくなっちゃうと思う。 ・プラスチックだって問題があるから、小田原漆器を使っていく方がいいと思う。 【仕方ない】 ・プラスチックの方が、生活するうえで便利だから、仕方ないと思う。 ・小田原漆器を残したいと思うけど、使っている人が少ないから仕方ないと思う。 ・似たようなものがあれば、安いほうを買うと思うし…。	・自分の考えを外化する時間を確保し、安心して話せるようにする。 ・立場ごとに話すことで意見を繋げ、論点を焦点化することで話合いが深められるようにする。 ・根拠づけが不十分な場合は、問い返しをして、事実に即して話させるようにする。 ・言いたいことが十分に伝わらない場合は、「○○さんの言いたいこと伝わった人？」と広げて繋げたり、教師がかみ砕いて意見をまとめたりと、安心して話せるように配慮する。
○「Ｏさんの資料」を読んで、自分の考えを再検討する。 ・立場は変わらないけれど、このままなくなっていいとは思わない。 ・「なくなったら、二度と復活することはない。」って言っているから、なんとかしたいけど、どうしたらいいのかな。 ・どうしたら、小田原漆器を守れるのかな？	・プラスチック製品の利点を、強調して出していきながら、「プラスチックすごいんだね。」というミスリードをすることで、資料による「ゆさぶり」をかける。 ・話合いが停滞した場合は、早めにＯさん資料を出し、改めて自分の考えを見直す時間を保証する。 ※仕方ないかどうかは、あくまでも「見せかけの問い」であり、資料や問い返しを通して「ゆさぶり」をかけ、本質的な問いにつなげていく。 獲得したい公民的な資質 「仕方ない部分もあるけど、仕方ないで済ませたくない。」という思いを引き出せるように、問い返しをする。
どうしたら小田原漆器を守っていけるの？ （なんとかしたいけど、どうしたらいいのかな？）	